

日系インドネシア人コミュニティにおける高卒モデルの事例研究 —茨城県東茨城郡大洗町における移住労働者とその子どもたちのために—

佐々木良造（秋田大学）・吹原豊（福岡女子大学）・助川泰彦（東京国際大学）

研究の目的・意義

「高卒生モデル」：高校卒業後に日本で就職した日系インドネシア人コミュニティの子ども
 目的：モデルが存在するにもかかわらず、そのモデルを参照する回路がない現状の改善
 意義：モデルの参照による、保護者と子どもの進路決定時の選択肢の拡大

ロールモデル参照のための提案

- ・ウェブサイト構築中
 - 「在日インドネシア人のための高校進学情報」
<https://gotohighblog.wordpress.com/>
- ・SNSの利用
 - Facebookの「友だち」1,000人
- ・教会コミュニティへの働きかけ
 - 「先輩の話を聞く」
 - 配布物作成（上記ウェブサイトの抜粋）
- ・地域の国際交流事業での情報提供
 - 「まなびの輪」
- ・大洗町の小中学校への情報提供
 - 大洗小学校日本語教室

先行研究

- ・宮島・太田（2005）
 - 「日本では進路決定における選択可能性を高めるための情報量が少ない」
 - 「子どもたちが進路を考える上で、モデルとなる存在が身近にいることの重要性」
 - 「子どもたちは将来の進路を考えると、家族との会話量に差があるものの、親や兄弟姉妹の助言や進学状況にある程度参考にしている」
- ・社会学における研究：坂本（2013）、乾（2007）など

研究方法と対象

研究方法：PAC分析（Personal Attitude Construction Analysis：個人別態度分析）
 調査対象者がふだん意識しない潜在的な部分を言語化したりすることが困難な場合がある場合、論理的でない自由な連想からスタートし、類似度を考えさせ、類似度評定を用いたクラスター分析の結果を調査対象者と調査実施者が問題を共有するという方法が有効な場合がある（土田2017）。
 研究対象：日系インドネシア人2名（以下、調査協力者A、調査協力者B）
 調査協力者A：2003年5月、4歳7か月で来日。県内の実業高校を卒業、水戸市内の食品会社に就職。調査時、社会人2年目。
 調査協力者B：2003年5月、5歳7か月で来日。県内の看護科の高校を卒業。同校の専門科で2年間学び、正看護師の資格を取る。調査時、水戸市内の病院に就職が決まっていた。

刺激文「あなたの就職（あるいは進学）が決まるまで、いつ、だれが、どんなサポートをしてくださいましたか。家族、まわりのインドネシアの人々、学校の友達、先生など、あなたの就職（あるいは進学）をサポートしてくれた人が、どんなとき、どんなことをサポートしてくれましたか。お金や物だけでなく、話してくれたこと（言葉）、精神的な支えとなったことなど、思い浮かんだ印象や言葉を、思い浮かんだ順に入力してください。」

結果と考察



図1：調査協力者Aのデンドログラムとクラスターの命名

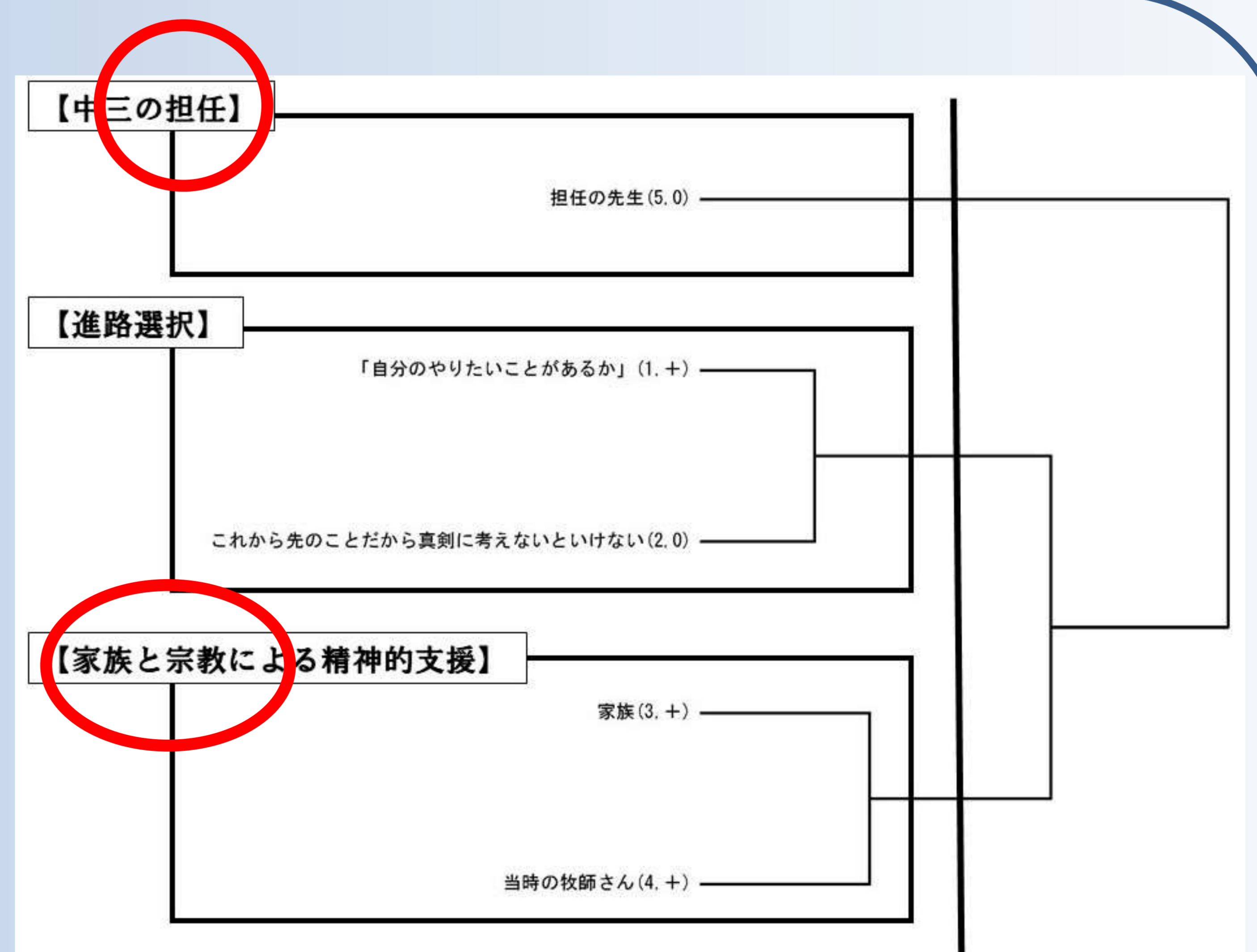


図2：調査協力者Bのデンドログラムとクラスターの命名

【参考文献】

- 乾美紀(2007)「ラオス系難民子弟の義務教育後の進路に関する研究—「文化資本」からのアプローチ」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』,vol.33,pp79-96
 坂本文子(2013)「高校へ進学できた外国人生徒たち—外国人生徒の高校進学過程の分析—」『理論と動態』第6号,<https://www.istdjournal.org/>日本語トップ/研究紀要/第6号/, 2018年11月22日閲覧
 土田義郎(2017)「PAC-Assist2」,<http://www.kanazawa-it.ac.jp/~tsuchida/lecture/pac-assist.htm>,2018年11月22日閲覧
 宮島喬・太田晴雄編(2005)「外国人の子どもと日本の教育—不就学の問題と多文化共生の課題」,東京大学出版

付記1: Ni Nengah Suartini(Universitas Pendidikan Ganesha), 八重樫 理人(香川大学)の2名の共同実践者を含む。
 付記2: 本実践はJSPS科研費JP15K02627, JP16H03436の助成を受けたものである。